

ぷれみあむ
みにっつ

第8集

宝くじを取り戻せ！
の巻

☆ shiroa ☆

事務所はすぐにわかった。時々歩いて通る道で、割と知っている場所だった。

「普段気をつけてないとわからないもんだね」

俺はぼそっと言った。

「本当、こんな堂々と名前掲げてたのね」

ビルの二階には “雲運運団 事務所” と堂々と書いてあった。黄色と赤を使った実に目立つが、実にセンスのない丸ゴシックの文字が、カッティングシートで貼られている。その下には “幸せ探求研究所 入会はお気軽に” と書いてあった。実に怪しい。

俺はカエルの言葉を思い出しながら、向かいの廃ビルを見た。寂れた薄緑色の、これまたセンスのない三階建てのビルだ。屋上には錆びた広告看板が残っていた。人気はなく、いつ雲運運団の関係者が出てくるかもわからない。俺は気をつけてそっと廃ビルのドアを開けた。

押し引きできる観音開きのガラスのドアには、丸い取っ手がついており、軽く押しただけで簡単に不法侵入できてしまった。管理者はいないのだろうか？

廃ビルの中に入り、狭いエントランスからすぐに階段が見えた。階段の下のスペースには集合ポストが配置されており、その奥から右手に通路が伸びていた。二人並んで通るのがやっとくらいの廊下だ。そこに規則的に数部屋のドアが並ぶ。こんなに狭いとオフィス道具も運び込むのが容易じゃないだろうなあと思いつつ、俺は階段へ向かった。

「なんか緊張する……、おぼけでないかな？」

人気がない、それだけで随分雑音が少ないのだろう。電気、水道、ガスが通らない建物というのは嫌に静かだ。血の通っていない、死んだ体の中に侵入したような感覚。

コンクリートが一段と冷たく感じた。

「大丈夫だよ、まだ日も高いし」

しかしもう夕方の四時だ。あと二時間もすれば日が沈む。暗くなる前になんとかコトは済ませたい。廃ビルの中で暗くなった場合、さすがにライトを使えば簡単にばれてしまう。携帯電話のライト機能は最悪の場合にのみ使用するくらいで済ませたい。

俺たちは息をひそめて三階まで階段で上がって行った。廃ビル、というとなんとなく荒れているイメージがあるが、人がいなくなった場所というのは意外と綺麗だ。散らかす人がいないからかも知れない。もしかしたらエッチな本でも落ちていないだろうか？ というふらちな想像が浮かんだ。ヤンキーとかがたむろする場所にここを使って、エッチな本をみんなで囲んで読んでいるビジョンが浮かぶ。

しかし階段を上がっていても、踊り場に出てもそんな様子はない。特にたむろしてタバコの吸い殻がいっぱい落ちてるとか、ガラスが割られているとか。そういう形跡はない。ただ床が砂っぽい程度だ。

三階に着いた。俺たちは通路を歩きながら、一部屋ずつドアを確認した。

ひとつめは閉まっていた。

ふたつめのドアはやや隙間があいていた。ノブを捻ると引っ込む引っかかりの部分がどうやら

壊れているらしい。アンロックの状態ですりゃ程度にドアが閉まった振りをしている。ノブを軽く引くと、油の抜けたきしんだ音をたてて、ドアは開いた。

「なんか、ドキドキする」

俺はひそかに本日二度目の吊り橋効果を期待していた。

「じゃ、入ろう」

俺は先陣をきって入った。本当に小さなオフィスしかできないだろうな、という広さ。恐らく八畳分くらいの広さだろう。入口側には1Kについてそうなちやちなキッチンがついていた。ガスは使えず、IHではない伝熱器でお湯を沸かすような古い電気コンロが据え置きされていた。ぐるぐると巻かれた線が、電気を入れるとオレンジ色になり、かなり熱くなる。昔おじいちゃんの家遊びに行った時に、それでやかんにお湯を沸かして、カップラーメンをごちそうしてもらったことがある。それを思い出した。

窓はすぐに分かった。昨日カエルたちが来て、そのままの道具がそこに残っていた。そこには御座と双眼鏡、食べかけのカール、そしてメモが落ちていた。

「なんだろう、このメモ？」

そのメモを開くと、“植木鉢の下”と書かれていた。

「ここは名探偵ミユウちゃんの出番ね。ちょっとかしてみて」

ミユウちゃんはメモをじっと見つめていたが、うまい考えが浮かばないようだった。

「じゃ、俺は雲運運団の様子をしてみるよ」

と言って双眼鏡を拝借し隣のビルを見てみた。

雲運運団の事務所は二階にある。窓を覗くと、パンダマンの姿があった。隣には顔は見えないが巨漢の男がいる。あの服装から察するに、弁慶だ。まだ弁慶と一緒にいるとなると、厄介だ。飛び込んで奪うことはできないだろう。

「ミユウちゃん、パンダマン、いたよ」

「へえ。じゃあちゃんと事務所に戻ったんだ。宝くじもって高跳びしなかったのね」

「これはある程度予想してたんだけど。パンダマンはあの宝くじを自分の力で取り戻したことを、組織の中で誇示したいんだと思うんだ」

「名誉欲ね。でも、普通はお金の方が嬉しいんじゃない？」

「お金よりも、尊敬とか羨望とか。それを優先する人間だっているんだ」

パンダマンは屋内でもパンダの被り物をかぶったままだ。あれではお茶を飲むこともできないだろうに、どうして外さないのだろうか。

「ねえねえ。パンダマンがいたことは好都合だけど、どうやって奪うつもり？ 事務所には他の人もいるかも知れないし、難しいと思うけど」

ミユウちゃんは心配そうだ。心なしか、ちょっと疲れているように見える。朝からずっと緊張していたんだ。当然だろう。これから宝くじを取り返そうとしているが、雲運運団、朝真会館の追跡を振り切った今が、もっとも安全な時といえるかも知れない。少し緊張の糸が緩み、眠くなったように思える。

「カエルたちもここで見張って様子をうかがっていた。ということは、何かしらチャンスがくる

ってことだと思う。もしかしたら、そんなチャンスは無いのかも知れないけど。可能性はある」
「どんなチャンス？」

俺は少し考えを整理して言った。

「事務所に誰もいなくなる、というチャンスだよ」

ミユウちゃんは呆れた顔で俺をみた。ま、そんな都合のいいことが簡単に起きれば世話ないわけ、当然のリアクションだろう。

「ハヤト、本当にそんなことが起きると思ってる？」

「うん、まあ。確信は無いけど、確率はあると思うよ」

そして俺はその根拠を語った。

「昨夜俺は自分の部屋に帰ったんだけど、それをカエルとハチマキは追ってきてたわけじゃない。で、俺の住んでる場所がわかってるにも関わらず、その日のうちに強行で奪いにきたりはしなかった。普通、そんなことはありえないでしょ」

「うん。ありえない。特にそれが自分の命に関わるんだったらなおさら」

「でも、カエルとハチマキは十一時以降は家に帰って休まないといけない、という習慣を大切にしている。目の前の大事よりも、習慣を優先したわけじゃない」

「まあ、確かにそうだね。カエルさんもそうだったものね」

「さてその前提のうえで、今回の覗き見を考えてみてよ。カエルたちはどうして覗き見していたのか。少なくとも、強行で奪いに行くよりも、安全で確率がある何か理由があるから、わざわざこの場所で監視してたんじゃない？」

ミユウちゃんは肯いている。

「俺の予想だと、休憩時間が定めてあるんじゃないかって思うんだ。ある時間になれば、事務所を抜けて、一息休憩を入れる、みたいな」

「でもそれだと矛盾が起きるわよね。カエルさんたちも休憩時間じゃない。雲運運団の習慣だと、カエルさんたちも休憩になって、結局奪いに行くとか、できないと思うわよ」

「それがそうじゃない。だって、これを奪いに行く時、カエルたちは雲運運団ではなく、朝真会館の回し者だったんだよ」

なんだかよくわからなくなってきたが、そういうことだ。

「そうか！ 覗き見してた時は、朝真会館の習慣で行動してたから、雲運運団の習慣は関係なかったんだ！」

なんとかミユウちゃんも納得したらしい。

「そしてその後雲運運団につかまったカエルたちは、今度は雲運運団として、俺から宝くじを奪い返そうとした。だからその時は雲運運団の習慣で行動してしまったわけだよ」

ロジックとしては合ってるかもしれないが、かなりバカな話である。冷静に考えると、カエルとハチマキはかなり頭が悪い。時には鳥類の仲間、時には動物の仲間を装い、双方の間をふらふらとどっちつかずに立ちまわるコウモリのような。

「つまり、雲運運団が休憩なり事務所を空にすることを、メンバーだったカエルたちは知っていた。その知識を逆手にとってここで張り込み、もぬけの殻になるのを待ったってことね」

ミユウちゃんは頭がいいなあ、うまく表現する。

「そう。たぶん、そんなとこじゃないかなあとってた」

そこでミユウちゃんの顔が曇った。

「でも、首尾よくパンダマンたちがいなくなって、留守になったとしたら。誰もいなくなるんだから、鍵がかけられるんじゃない？」

あ、そうか！ 忘れてた！

「そりゃそうだね。困ったね」

「ええ！ ハヤトそんなこと気付かなかったの?!」

俺は大きく肯いた。「うん」。

「もぬけの殻になれば、簡単に奪えると思ってた」

鍵が閉まる。そりゃ、留守にするんなら、鍵を閉めるだろうなあ。針金で鍵を開けるとか、そんな芸当は俺にはできない。どうすればいいんだ？

「ごめん、ミユウちゃん。俺、そこまで考えてなかった」

ミユウちゃんは呆れた顔で溜め息をつくど、手に持っていた紙に目線を落とした。

「はあ、あたしはこの謎を解くのに一生懸命なのに」

その数秒後、ミユウちゃんは隣のビルに聞えるんじゃないかと思うくらい大声で「わかった！」と叫んだ。

「このメモに書かれた意味、わかったわ！ 植木鉢の下、ここに鍵があるってことよ！」

俺はそれを聞き、驚愕した。

「えええええええ！ そんな安直なことってありい?!」

まったく想像していなかった。が、十分ありえる話に思えてきた。

「カエルとハチマキは、ちょっと頭が足りなさそうだったからなあ。鍵の場所が分からなくなると困るって考えたら、メモを残すかも知れない。……普通、ありえないけど、あいつらなら、ありえそう」

ミユウちゃんも肯いた。

「じゃ、作戦は出来たね！ なんかあたし、疲れてきちゃったから、ちょっと休む。ハヤトはしっかり様子を確認しておいてね」

そういつてミユウちゃんは三角座りで眠り始めた。

「おやすみ、ミユウちゃん。ゆっくり休んでてね」

俺は優しく声をかけた。

こうして膝に顔をうずめて眠るミユウちゃんをみていると、まるで小学生のようだ。おれは断じてロリではない。小学生にドキドキしたりしない。しないが、ミユウちゃんは特別だ。……いや、その表現はおかしい。ミユウちゃんは成人した女性だ。だからミユウちゃんが小学生なわけではないので、小学生っぽく見えても、決してロリではないということ。でも、外見上小学

生に似ているのなら、それでドキドキしちゃうのはやはりロリなのだろうか。

なんかわけがわからなくなってきた。

そんなことより、しっかり見張ってよ。

俺は双眼鏡をのぞき、雲運運団の事務所をみた。ちょうど椅子があるのだろう、パンダマンが座っており、弁慶は窓枠からフレームアウトする形で後姿が一部見えた。そこにコアラの着ぐるみの頭を被ったヤツが通りがかった。

なんであいつらは、こんな被り物をしてるのだろうか？ 弁慶は雲運運団ではなく、パンダマンの友達だったから良いとして、ハチマキだけが例外か。その理由もカエルに聞いていけばよかった。

時計をみると四時四十五分。特別動きはなさそうだ。後は雲運運団がもぬけの殻になるのを待つだけ。それが、何時になるのか。……できるだけ暗くなる前には片をつけたいものだ。

俺はコンビニで買ったキスマントの封を開け、一枚口に入れた。指が少し鼻に近づいた時、ドリァンの臭いがした。

ミユウちゃんがこんな傍にいる。二人だけ。……なんかこのシュチュエーションをあらためて考えると、何か起きてもおかしくない気がしてきた。

俺はそっとミユウちゃんの傍にすり寄ってみた。そして肩をそっと抱こうと手を伸ばした。右手の人差指が肩に触れた瞬間だった。

素早いジャブが俺の顔面にヒットした。

「痛っ、起きてたの?!」

ミユウちゃんは何事も無かったかのように左手を元の態勢に戻し、スースー寝息をたてている。

……自己防衛機能のようだ。恐るべし！

俺はミユウちゃんにちよっかい出すのを諦め、双眼鏡を手のひらで弄び、何か面白いことでもないかと考えた。双眼鏡をポンポンと五センチくらい宙に浮くように投げては受ける。

その時、脳裏に雷が閃いた！

これぞ悪魔的、犯罪級思考。俺はそのとんでもない閃きに身震いした。

考えてみればこんなチャンスはまたとないだろう。誰もこのビルには人がいないと思っている。窓さえ開けなければ、外から私の姿はよっぽどじゃない限り分からないはず。——まるで透明人間だ。誰しも透明人間になれた時、何をやってみたいか。そんなもの、自明の理だろう。

俺は窓から外をみた。目の前のビルは四階建てだが、その隣は二階建ての家屋だ。その家屋の

上をみると、そこには駅近くに立っている高層マンションが見える。

俺は高層マンションに視点を定め、素早く双眼鏡の視度調整を行った。徐々にピントがあって来るにつれ、俺の胸はドキドキしてきた。

今の時間、有益に過ごすには、人の生活を観察してみる、それがベストだね！

昔の友人が言っていた。電車に乗った際、人間観察ができて勉強になると。電車に乗っている際、そこに居合わせた他人の生活の一部がそこではパノラマのように展開される。その断片を集めると、あらゆる人の生活が見えてくるといふ。また、その人の心理状況、考え方がうかがえるという。

これは断じて覗きではない。人生勉強なんだ。夕方のせわしない時間、マンションに住む人たちは、どういう日常を送っているのだろう。

夕食の準備をしている人もいるだろう。趣味に没頭している人もいるだろう。……もしかしたら、こんな、日が出ているうちから、何やらエッチなことをしている若者もいるかも知れない。

カーテンも閉めずにあられもない姿を呈して、そんなことをしてるの、たまたま見つけちゃうかも知れない。

これは、人生勉強なんだ。

俺は自分の心にそう納得させ、マンションの一室、一室を確認していった。が、ほとんどがカーテンが閉まっていて中が見えない。洗濯物を取り込んでいる人、窓が空いていても、掃除機をかけている人。まあ、本当に日常的な風景がそこに見えるだけだった。

ま、そんなもんだろうなあ。現実って。

ちょっとエッチな期待もしてたのに。残念。双眼鏡をのぞいてみるのって、慣れてないためか割と疲れた。俺は最後に雲運運団の事務所にレンズを向けた。

しかしボーっとして像がはつきりしない。ああ、遠くのマンションに焦点を合わせてたから、断然近い道路向かいの建物の距離は見えなくなってしまったんだ。俺はくいくいっとダイヤルを回して視度調節を行った。

ぼやけた像が少しずつくつきりしてきた。そこにはパンダマンの姿は無かったが、弁慶が椅子に座っていた。弁慶の姿であまり確認できなかったが、テーブルにはペットボトルのお茶が置いてあるようだ。

先ほどまでパンダマンがいた場所の後側は、レターケースが置かれていた。この事務所のどこに宝くじが置かれているのか、それを探しだすのも苦労するかもしれない。

俺は双眼鏡を床に置くと、少し休むことにした。

ミユウちゃんの真似をして、三角座りをして顔を膝にうずめる。

想像以上に体は疲れていたのかも知れない。ふいに眠気が襲ってきた。そして目の前には親父の姿が浮かんだ。

「ハヤト、本当にお前はバカだな」

う、うるさい！

「なにをやっても駄目な奴だ」

カンケーないだろ！

「勉強ができなくてもいいが、違うことで何か目立てないと、ただの落ちこぼれになっちまうぞ」

俺は動けなかった。拳をぎゅっと握りしめ、とびかかっていたかった。

いつか、見返してやる！ そう言ったつもりだが、言葉は出なかった。

……音楽が聞こえてきた。このちょっと切なく、アンニュイなメロディは、「恋は水色」。

と、そこで目が覚めた。俺の住む町では時間を知らせるメロディが夕方五時に流れる。「恋は水色」は街にくまなく配置されたラウドスピーカーから聞こえてきた、リアルな音楽だった。

もしかして、これが合図になってるかもしれない。五時といえば、たいていの仕事でも一区切りになる時間だ。俺は咄嗟に双眼鏡を持って、雲運運団の事務所をみてみた。個性的な格好をした人が、一方向に動いていく。パンダマン、弁慶の姿はそこには無かった。

俺は肉眼で雲運運団が入っているビルの出口をみた。しばらくの時間があつたが、ぱらぱらと人が出てきた。奇妙なカッコウの人と、普通のサラリーマン風の間人が混ざっている。ざっと十人程度といったところだ。

しばらくしてパンダマンと、弁慶も出てきた。二人は表通りに向かって歩いて行った。

「ミユウちゃん、起きて！」

ミユウちゃんに声をかけたが、返事は無かった。目の前の通りに人の気配はなくなった。事務所にも人の姿はない。もしかしたら事務所には誰か留守番がいるかも知れない。けど、恐らくこれがチャンス、それは間違いないだろう。

十分休み、という言葉が脳裏をよぎった。学校での休み時間。もしかしたらそんな短い時間しかこのチャンスはないかも知れない。急がねば！

ミユウちゃんをみた。彼女は三角座りのまま、依然スースー寝息をたてている。一人きりにするのは不味い。けど、数分のことだ。一人ですぐに行って戻ってくればいい。弁慶はいないのだから、もし留守番がいたとしてもなんとか逃げ切れるはず。とにかく、今出ていった連中が戻って来るまでに行動を起こさねば！

俺はそんなことをコンマ数秒の内考え、クラウチングスタートで駆けだしていた。階段を駆け下り、静かにビルの外に出る。見事に閑散と人気はなくなっていた。好都合だ！俺はすぐに向かいのビルに闖入し、二階の雲運運団の事務所に向かい駆けた。体は軽かった。階段は二段飛ばしでぴょんぴょん跳ねるように上がった。胸の鼓動はテンポを速め、やがて16ビートを刻んだ。

雲運運団の事務所の前。スチール製の冷たいドアがあり、その右手には植木鉢が置いてあった。観葉植物なのだろうか。妙に埃っぽく感じるから、もしかしたら作り物かもしれない。

事務所には人の気配はない。ガラス窓から通りをみてみたが、誰もいなかった。俺は足音をたてないように事務所扉に近づき、スチール製のドアノブを握った。少しずつ力を込め、回す。止まったところで手前に引いてみたが、開かない。予想通り、鍵が掛かっていた。

かえって好都合だ。鍵をかけていったってことは、完全に留守の可能性が高くなる。俺は予想していた通りに植え木の下を調べてみることにした。植え木は驚くほど軽く、どうやら直観通り作り物だったようだ。植木鉢の下からは、アンパンマンのキーホルダーがついた鍵が見つかった。

俺は躊躇なくそれを手にすると、息をひそめて鍵を開けた。

がちやり。渴いた音を発てる。

もし中に誰がいるのなら、この音を聞いて出てくるかも知れない。――そんな心配もあったが、非日常的な緊張からか、俺は少し行動が大胆になってきた。俺はドアノブを掴むと、勢いよくドアを開けた。中に入ると普通の会社のフロアを思わせるコクヨのねずみ色したロッカーや、擦りガラスのパーティションが目についた。パーティションで遮られた場所から左手にすり抜けると、隣のビルから覗いていた応接室らしき場所に出た。その奥は完全に目隠しになるパーティションで区切られている。が、これ以上奥に行く必要はなかった。

応接室、覗いていた角度からは見えなかったが、奥の天井近くに神棚があり、そこにさもありがたげにしわくちやの宝くじが置かれてあった。その隣にはこれまたしわくちやの新聞の切り抜きがおいてあった。間違いないだろう。長居は無用だ。俺は宝くじだけ手にし、すぐに外に出ようとした。

と、その時壁に貼り付けてある紙が目に入った。それは“雲運運団・規範スケジュール”と題されたもので、一日の予定が表となって書かれていた。

『午後五時から十五分間必ず休憩をとりましょう。事務所にいちゃダメ。活動しようとするから。リフレッシュは大切だよ。この間は一般に戻ってもよし』

なんかよくわからないけど、とりあえず今しばらくは安全なのがあった。が、再びここに戻って来ることも間違いのないわけだ。はやくずらかろう！

と、もう一つ目についてついつい読んでしまった。

『午後十一時以降は活動は休止。必ず一般に戻ることに』

カエルが言っていたのはこの規範のことなのだろう。一般に戻るってのは、どういうことか。いまちピンとこないが、今は考えている暇はない。俺はすぐに事務所を出ると、鍵をかけた。

窓ガラスから外をみると、変な被り物をした連中がビルの入り口に近づいているのが見えた。

……まずい！

俺は急いで植木の下に鍵を隠し、階段へ向かった。あの変な連中はこれから階段を使って上って来るだろう。このまま一階に下りたら鉢合わせしてしまう。仕方がない、五時十五分から事務所で何かがあるわけだから、その時間まで三階へ上がり、廊下に人気なくなるまで待つとしよう。そう決断すると、俺はすぐに階段を上った。折り返しになる踊り場で二階のフロアを見下ろすと、割とリアルな熊の頭を被ったスーツの男が、事務所に向かって歩いているのが見えた。危なかった。

つつつかと数人の足音が聞える。雑談はなく、静かなものだ。もし誰か三階に上ってきたら…そう考えると恐かった。

不安なことが二つある。ひとつはミユウちゃんだ。もし目が覚めて俺がいないことに気付いたら、どれだけ不安を感じるだろう。はやく行って安心させてあげたい。

もうひとつは深刻だし急を要する。雲運運団の誰かが神棚にあるはずの宝くじがなくなっていることに気付くことだ。恐らくあれだけあからさまにあったものだから、すぐに誰か気付くだろう。そうしたらこの休憩時間にパクられたと気付く。盗んだ人間がまだ近くにいる、と考えたら……。十数人はいるだろう雲運運団がこのビルや近辺を調べつくすだろう。

一刻も早くここを去り、ミユウちゃんと合流して安全な場所へ逃げなければ！

そう思い脂汗を滲ませていると、階段を上る足音が聞えてきた。……団体ではない。二人分の足音。確実に、この三階へ上がってきている。背筋が冷やりとした。俺はそっとフロアで隠れられるところがないか探した。が、観葉植物すらない。このビルにはひとつの階に二つの事務所が入れるようになっていよう。トイレは、ない。エレベーターも、無い。俺はとりあえず四階に行くしかない！ と思って上がろうとしたら、子供の声が聞こえてきた。

「ママ！ 僕絶対もっと強くなるよ！」

「本当、ユキオちゃんは頑張りやね。頑張ってるね。英語も楽しい？」

「うん！ 楽しい！」

上がって来た二人組と云うのは雲運運団とは関係のない親子だった。二人は上って右手へ曲がっていった。

とりあえず良かった。けど、強くなるとか、いったけど、格闘技の教室でもやっているのだろうか？ それとも英語教室か。

俺はちょっと気になったので二人が消えて行った事務所の扉を確認した。そこには『子供囲碁英会話教室』と書かれてあった。

なんだこれ？ ハイブリッドの悪ノリか？

俺は見なかったことにして、再び階段に近づく。そして下の様子を確認した。足音はもう聞えない。時計を見ると五時十六分。休憩時間は終了だ。あとは遅れてくる人間さえいなければ、問題ないだろう。

俺は静かに階段を下りはじめた。二階にさしかかったところで、雲運運団の事務所から何やら不気味な斉唱が聞えてきた。

『我々、雲運運団は、穢れた地の法を破り、天上の清浄なる法に於いて……』

やはり何やら怪しげな宗教っぽいな。

ともかくこの時間は連中全員が斉唱に集中しているはずだから、今が一番安全だ。俺は足早に階段を駆け下りようとした。

と、そこにコアラの被り物をしたスーツの男が猛ダッシュで階段を駆け上って来た！

「やっべー！ もう団員方針斉唱はじまっちゃってるぜ。パンダマンにどやされるう！」

俺は逃げるべきか逡巡したが、そのまま何事もないようにすれ違うことにした。

子供囲碁教室に送り迎えしている親。そうとられれば決して不自然な人間ではないはずだ。ちょっと若すぎる親だけ。ねーちゃんに頼まれて姪っ子連れてきたことにすればいいか。

もうすでにすれ違っているにも関わらず、俺はその後も自分へのいいわけのように理由づけを必死で考えながらビルの外に出た。

『……そして仮の姿を脱し、新生した人生を実相に於いて顕現せしめん』

ちょうど外に出たところで斉唱が終わった。隣に民家があるけど、そこん家の人って苦情言わないのかなあ？

俺は廃ビルに入ると、すぐに三階へ上がりミユウちゃんが寝ている場所へ急いだ。

「ごめん、遅くなった！」

俺が部屋に入ると、そこは寂寥とした空間が夕日に染まり、真っ黒な影と強烈なコントラストを作っていた。

ミユウちゃんは、そこにいなかった。

あとがき？ 次回予告？ ひとりごと？

しろあです。

ついにドキドキハラハラの、この作品の山場のひとつがやってまいりましたよ。

廃ビルへの侵入。

ミユウちゃんとふたりきり。

窓から街をのぞく、のぞき行為。

事務所への侵入。

そしてそこからの逃亡……。

そしてその後驚きの展開が待っています。

う〜ん、今回は詰め込んでるなあ。

読み返してて面白かった。

続きまして。次回は一時休戦といったところでしょうか。

ハヤトはその後どうするかを改めて考えなければいけなくなります。

そんな折、すごくバッドなタイミング(?)でとある訪問者がやってくる。

その訪問者は吉をもたらすか、凶をもたらすか？！

「第12話 雨の訪問者」

ご期待下しませ。